

聖霊降臨後第11主日(特定14)

2010/8/8

聖ルカによる福音書第12章32節-40節

聖パウロ教会キャンプ 於:清泉寮黙想館

司祭 山口千寿

「懼るな小さき群れよ、なんじらに御国を賜ふことは、汝らの父の御意(みこころ)なり」(文語訳)。

今日の福音書の冒頭のみ言葉です。わたしたち、日本の教会は、このみ言葉にどれ程、慰められて来たことでしょうか。キリシタンの時代は別として、キリスト教が日本社会で宣教を開始して、既に150年になりますが、日本の教会は信徒の数から言うと、カトリック・プロテスタント合わせても人口全体の1パーセントにも満たない、小さな群れにしか過ぎません。わたしたちの先輩の聖職・信徒の方々が、宣教のためにどれほど多くの努力を重ね奉仕をしてきたか、それこそ何もかも捧げて、血の出るような苦勞をして来られたと思います。それにも拘わらず、人数という点では、日本の宣教は成功したとはとても言えない状況です。

わたしたちの聖パウロ教会は、施設としては大きな教会ですから、自分たちが小さな群れだという実感を余り持っていないかも知れません。しかし、わたしが管理をしているマリア教会は、規模の小さなことでは東京教区の中で最右翼に位置する教会の一つですから、小さな群れであることが目に見えて分かるのです。わたしがかつてマリア教会の牧師館に住んで主日礼拝を担当していた時代には、ウチの家族ともう一組の二家族のみで主日礼拝を守ったこともありますし、出席者が10人未満のこともしばしばあったわけです。それだけに、しっかりとした信仰に基づかなければ、教会の灯を点し続けることは困難なのです。

このような教会が、日本の各地でもって灯火を掲げながら宣教に励んでいるのです。その中には専任の教役者のいない教会も少なくないのですが、信徒の皆さんが交代で証や感話をしながら礼拝を守っています。そのようにせざるを得ない状況があるのですが、ただ単に義務感、責任感からだけでそうしているわけではありません。義務や責任を感じて悲壮な気持ちでそうしているとしたら、それは決して長続きはしません。そのように奉仕することに喜びを見出すから、進んで自分を捧げられるのです。

今、カトリック教会でも神父さんが高齢化のため、また志願者が減少したため足りなくなっていることが、大きな問題になっています。神父さんが主日礼拝にいなかったり、毎日のミサが捧げられないことが起きてくるわけですが、そのようなときには、聖公会の信徒奉事者のような、特別の認可を与えられた信徒の奉仕者が、ミサのみ言葉の部分を司式し、そして、既に聖別されているパンを分餐してミサを行うこともあるようです。

昔は、信徒は神父さんのしていることを見ていれば、それで済んだのですが、今は積極的に礼拝を初めとする教会の働きに参加していかないと、教会が成り立っていないという状況があるようです。それをただ単に危機的状況とだけ捉えるのではなくて、礼拝の奉仕に使命を感じて、喜びをもってそこに加わっていく信徒

の方が、カトリック教会にも生まれてきているのです。

わたしたちの目には、日本では飛び抜けて大きな教会と見えるカトリック教会でも、ミサの執行に支障が出てくるようなことから、日本の教会は、どの教会であつても決して大きな群れではないのです。

小さな教会を支えていく信徒たちは、自分たちが頑張らなければいけない、頑張っているという自負や喜びもありますが、同時に教会の明日のことを思い、様々な不安や心配も起きてきます。教会のことが心の中を大きく占めてくるようになります。

そんなときに、「恐れるな、小さい群れよ。御国を下さることは、あなたがたの父のみこころなのである」(聖書協会訳)というみ言葉によって、小さな信徒の群れは慰められ、励まされ支えられて参りました。このみ言葉の直前には、命のことや体のことで何を食べようか、何を着ようかと思ひ煩うな、という教えが弟子たちに語られています。マタイ福音書の山上の説教の中で語られた教えと同じものです。

これは個人の生き方について教えられているだけではなくて、教会の在り方についても当てはまることです。教会の先々について思い悩んでいる小さな群れに、父なる神さまが御国を下さることは、父なる神さまの喜びなのだ。その喜びに、あなたがたは与ることができるかと約束されているのではないかとイエスさまは告げておられるのです。そして、この約束されている神の国をもたらして下さるのは、他ならぬイエスさまご自身です。

ところで、「小さな群れ」というのは、どのような群れのことでしょうか。人数のことなのでしょうか。確かにそれもあるでしょう。弟子たちは、この福音書が書かれた時代には、まだ一握りの少数のグループであつたでしょう。しかし、人数のことだけではないと思います。「小さい」というのは、何が小さいのでしょうか。信仰が小さいのです。信仰が小さいから、そこでは神さまが小さくされているのです。神さまが小さいから、恐れが生じるのです。「小さな群れ」というのは、「恐れる群れ」のことです。

ですから、人数が少なくても信仰がしっかりしていれば、「小さな群れ」、「恐れる群れ」ではありませんし、多数の信徒がいても、「小さな群れ」でしかないこともあるのです。イエスさまは、信仰の小さい、恐れの中にある弟子たちに、「恐れるな」と呼びかけておられるのです。この世の様々な強力な力に押されて潰れそうになって、信仰の心が弱くなっている群れに向かって、恐れずに生きることが勧められているのです。

今日の福音書の後半は、主人が婚宴から帰ってくるのを目を覚まして待っている僕のたとえです。主人が帰ってくるのはいつであるか、はっきりとは分かりません。当時の婚宴は、大変長時間に亘つたといいます。それが真夜中までになるのか、それとも明け方までかかるのか、はっきりしませんが、主人が帰ってくることは確かです。その帰りを、帯を締めていつでも動くことができるように準備し、そして帰ってきた主人の足下を照らすように灯火を点して待っていることが命じられています。そして、不思議なことに主人は帰ってきたら、目を覚まして用意をして帰りを待っていた僕たちを食卓に着かせ、そばに来て給仕をしてくれるというのです。

同じルカ福音書に、畑仕事や家畜の世話を終えて家に帰って来た僕のたとえが

あります。そこでは、家の主人は、帰ってきた僕に、直ぐ食事の席に着きなさいとは言わないと語られています。むしろ、僕は帰ってきたら主人のために食事の用意をして、帯を締め給仕しなさいと命じられるのが当たり前だ、と語られています(17:7)。それが、この世における主人と僕の関係です。

ところが今日の福音書では、その関係が逆転しています。主人が僕を食卓に座らせ、進み寄って給仕してくれるというのです。これはこの世の論理や秩序とは異なることが語られています。それが、神の国の姿です。「小さな群れ」に約束されている神の国の宴です。

現実がどのようなものだろうと、この神の国、イエスさまが再び来られることによって実現される神の国を待ち望むことが、「小さな群れ」の現在を生きる姿勢です。

しかし、わたしたちは、今、完全に天国に移されているわけではありませんから、今日明日のこともないがしろにはできません。大事にしていかなければなりません。でも、それは神の国を待ち望むという展望の中での、今という時なのです。遠くまで見通す眼差しの中にある今日であり、明日なのです。

そのような今日明日に生きるわたしたちの生き方は、天に宝を積むような生き方を選び取ることです。自分の生活についての責任は、自分で負うことに極力努める必要がありますが、あらゆる生活の領域でそれができるわけではありません。他の人からの助けを借りることもありますし、社会の仕組みの中で扶助を受けることもあるでしょう。そして、そのような利益を喜んで受けるだけではなくて、むしろ、自分が受けるよりももっと多くを他の人に対して、また社会に対して還元していくことが、わたしたちの関心となり、また、現実となるような生き方です。

日本の教会は、その出発点から、教育の分野でも、医療や社会福祉の領域でも多くの貢献をしてきました。そして、今日、それらの働きが社会の責任において行われるようになったわけですが、わたしたちはわたしたちを必要としている新たな働きは何であるか、そこに気づき、目を留めて取り組んでいくことが、教会としても、一人一人としても天に宝を積むために求められていることであると思います。

わたしたちが天に宝を積むことによって、富の思い煩いから解放されて、隣人と共に神さまの慈しみに生きることができるよう、今日は、お祈りいたしましょう。